

漢蘭酒話

下

X

k48-2

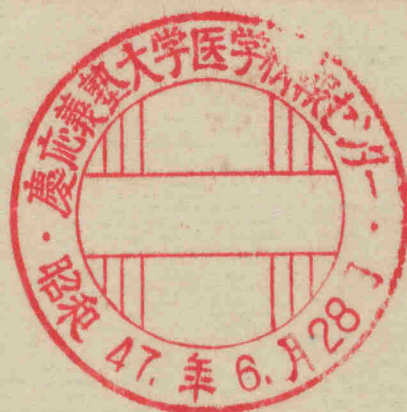
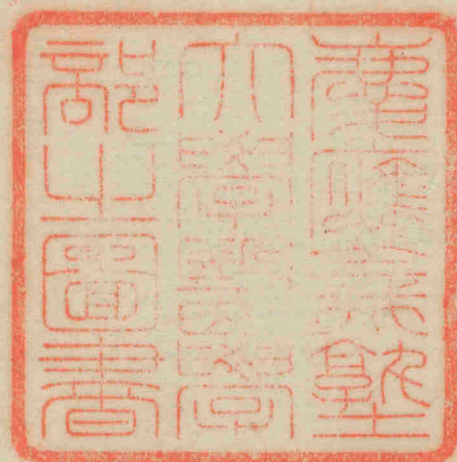
490.4

Ka-7

3

No. 2536

旧 K 48-2



富士川文庫

666

漢蘭酒話卷之下

學半樓主人 著



某氏又問曰。漢家ノ痘瘡察法ハ。愚既ニ
爭ヲ聞ケリ。愚ハ西洋ノ書ノミ読テ中
華ノ學ニ昧ケルハ。中華痘瘡流行ノ濫
觴ヲ知ラズ。願クハ其原始ヲ告ケ玉ヘ。
余答曰。中華痘瘡ノ推興。史氏ノ昏ニ載
セサレハ。其詳ナルヲハ知リ難シ。景岳
全書ト云フ書ニ。痘瘡ノ一症。俗曰天瘡。
原其所由。實由胎毒內藏。而復因時氣外

觸其毒乃發。故伝染相似。是亦天行疫癘
症也。但攷^レ之内經。則止言瘍疹。卽今斑疹
之属也。故自越人仲景。元和叔和諸公。皆
無一言及痘。可見上古無是症。トアルハ
痘瘡ハ中華ニテモ。後世ニ始リタルト
見ヘタリ。其病ノ医書ニ載セアルヲ總
攷スルニ。外臺祕要ト云フ書ニハ。漢ノ
建武ノ初。中国ヨリ南陽ノ麴ヲ征伐
セシニ。其時ノ人數虜ニテ痘瘡伝染シ
来リテ。中国ニ始テ其病出来タリトアル

リ。赤水玄珠ト云書。及ヒ痘經會成ト云
皆モ。此ト同説ナリ。又袁氏世伝痘疹全
畧ト云。畧ニハ。漢ノ時張騫ト云フ人。西
域ニ入リタルニ。其時痘瘡伝染シテ。始
テ中国ニ入リタルアリ。又肘后方ト
云フ書ニ。永徽四年。痘瘡西域ヨリ東シ
テ。中華ニ流入ストアリテ。流行原始ノ
年代説ク如各同ジカラズ。又漢ノ建
武ト云フハ。後漢ノ初代ノ帝王光武ノ
時代ノ年号ナリ。又漢ノ張騫ト云フ人

ノ西域ニ入シ年ハ。前漢書ノ列伝ニ拠
ルニ。建元年中ノトト託シタリ。建元ト
云フ年号ハ中華年号始リノ名ニテ。前
漢ノ孝武皇帝ノ時代ナリ。前漢ノ孝武
皇帝ヨリ。後漢ノ光武皇帝マテハ。孺子
嬰王莽ヲ數ニ入レハ。十一代ヲ歴テ。遠
近多分相違セリ。又永徽ト云フハ。唐ノ
二代目ノ天子高宗皇帝時代ノ年号ナ
レハ。此ハ又年代大ニ隔タリタルトナリ。
孰レカ正説ナルヤ。今日ヨリ明ニ知ル

ヘカラサレト。然レ前漢ノ建元年中ニ。
痘瘡始テ中国ニ入リタルト云フ。袁氏
世伝痘疹全書ノ説ニ依レハ。建元年中
ヨリ。張仲景孝廉ニ挙ケラレ。長沙ノ太
守ニナラセ玉フ。後漢ノ靈帝ノ時代ニ
至マテ。張仲景孝廉ニ挙ケラレ。長沙ノ
見ヘタリ。史ニ。三百餘モ隔タレハ。其頃
ニハ必ス蕃衍シテ。海内一般流行スヘ
キニ似タリ。去レ傷寒金匱ニハ。其病絶
テ沙汰シ置キ玉ハサレハ。其説疑フヘ

キナリ。又永徽四年。痘瘡始テ中国ニ入
ル。ト云フ。肘后方ノ説ニ依レハ。三因方
ト云フ。昏及ヒ続医説ト云フ。昏ニ。魏ノ
代ニ既ニ痘瘡ノ藥始レリト載セアレ
ハ。唐ノ永徽四年ト云フ。説ハ誤ナル。丁
明ナリ。左スレハ。後漢ノ建武年中。中国
ヨリ虜ヲ征代セシ時。痘瘡始テ中華ニ
入リタルト云フ。外臺祕要。赤水玄珠。痘
經會成ノ説ハ正キ様ニ思ル。ナリ。建
武年中ヨリ。靈帝時代マテハ。百五六十

年程隔ハ。其頃ニハ痘瘡アレ。アル。国
モアリ。無キ国モアリテ。南陽。長沙。ナド
ニハ。絶テ無カリシ故。仲景氏モ沙汰シ
置キ玉ハヌト見ヘタリ。且ツ痘瘡ノ一
名。虜瘡ト云フ。赤水玄珠。痘經會成ニ
見ヘタレハ。建武年中。虜ヲ征伐セシ時。
中国ニ始テ流传セシト云フ。説ノ正キ
一徴ナルヘシ。盖シ痘瘡ハ後漢ノ初二
始リテ。三国ニ至リテ漸ク蕃衍セシユ
ヘ。魏ノ時ニ始テ其藥出タリ。魏ノ時ヨ

リ隋ノ頃マテハ蕃衍セシト雖氏未タ
天下一般流行セシホトニモ無シテ高
平ナドノ地ニハ無カリシト見ヘテ王
叔和王叔和ハ高平ト云ノ人ナル見
エタナトモ沙汰シ置サルナリ隋ノ世
ヲ歴テ唐ノ初永徽四年ニ天下一般流
行セシ様ニナリタルト見ヘタリ其事
ヲ誤リ伝ヘテ肘后方ニ永徽四年痘瘡
始テ中国ニ流入スト云トシモノナル
ヘシ叔又足下心得ノタメニ余力論ゼ

シ昏ノ文語ヲ舉ケ示スベシ外臺祕要
曰肘后比歲有瘕天行癰斑瘡頭面及身
須臾周匝扶如火瘡皆戴白漿隨決隨生
不即療劇者數日必死療得差後瘡癰紫
黯弥歲方滅此惡毒之氣也世人云以建
武中於南陽擊虜所得仍呼為虜瘡赤水
玄珠曰上古之時未聞痘瘡之症素難之
文鮮有及者豈其人淳麗朴野積精全神
虛邪苛毒莫之能害歟或云自建武擊虜
遂染其毒流布中国謂之虜瘡痘經會成

曰。上古渾沌未漓。故痘瘡未興。迨自中古。漢建武初。征南陽諸虜所獲。名曰虜瘡。表氏世佗痘疹全書曰。痘疹一症。上古無之。漢遣張騫入西域。始傳其瘡。初日尚鮮。後漸蕃衍。今則薄海群生。間有不患者。亦罕矣。惟其毒始于漢。故漢以前。醫經無其說。肘后方曰。永徽四年。痘瘡從西域東流于海內。トアリ。是余力總攷セシ。昏ノ大概ヲ舉ク。足下モル。來漢學ヲ學ヒハ。學ノ長ズルニ從ツテ。異見出來ヘシ。余カ今

日ノ話ハ。其階梯トナスヘシ。

某氏又問曰。痘瘡ノ我カ

皇朝ニ流行セシハ。何レノ時代ニ推興セシヤ。余答曰。余ハ和學ニ昧ケレハ。此ニハ諸説アリヤ。其トハ知ラザレト。我カ

本朝痘瘡ノ流行セシ始ハ。

聖武天皇ノ御宇ト覺ヘタリ。璽囊抄ト云フ書ニ。

聖武天皇。天平八年。丁丑。天下疱瘡起ト

アリタルト知レリ。然シ其昏ハ余所持
ナケレハ。今示ス丁能ハサルナリ。他日
足下索搜シテ知ルヘシ。

○某氏又問曰。痘瘡ノ藥ハ何レノ世ニ始
リ。如何ナルモノヲ主藥ニ用ヒタルモ
ノナルヤ。余答曰。前ニ言ヒシ如ク。痘瘡
ノ藥ハ。魏ノ世ニ始テ出テタリト
見ヘタリ。三因方ニ。斑瘡内經典張仲景
皆不載。尋撫方論。蓋自魏朝方有。又統醫
說ニハ。疹痘自漢以前。方書不載。至拓拔

魏時始有方藥トアレハ。是其徵ナリ。然
シ其時何等ノ藥ヲ主トシテ用ヒタル
モノヤ。今知ルヘカラス。外臺祕要ニ。虜
瘡諸医參詳作療。用之有效方。取好蜜通
身摩瘡上。亦以蜜煎升麻數々拭之。亦佳。
トアリ。又但煮葵菜葉蒜薤啖之。則止。鮮
羊血入口亦止。初患急食之。少飲下菜亦
得トアルニテ。魏朝ノ時ノ痘瘡藥方ノ
不備ヲヲ思ヒ知ルベキナリ。活幼心法。
痘科鍵ナトノ昏出サル前ハ。痘藥並ヒ

痘療ノ了ハ甚夕疎ナルト見ヘタリ。扱
テ後世ニ至リテモ痘瘡ノ藥ニ格別奇
方アルヲ聞カズ。黃晟集驗良方ト云フ
昏ニ治痘風眼。用本人痘瘡殼。或同父母
之兄弟痘瘡殼。研爛。將香油調和。搽眼邊
皮上。二三次。神効トアリ。本中綱目ニモ
人部アルニ痘瘡殼ノ効ヲ載セス。果シ
テ効驗アルヤ否ヲ知ラサレニ奇方ト
云フヘシ。又張氏醫通ト云フ書ニ移痘
丹。治痘出目中。初見點時。用此移之。守宮

十枚。去頭足。配辰砂一錢。陰乾。珍珠。茯神。
遠志肉。各一錢二分。琥珀五分。為末。紫中
膏和丸。如梧子。每服一錢二分。欲移在手
足觀柱。葳靈仙煎湯下。欲專移在足。牛膝
木瓜煎湯下。微汗為度。再用後藥二服。川
芎。藁本。荆芥。白芷。各五分。蟬脫三分。防風
八分。生姜一片。葱白一莖。水煎溫服トア
リ。此方ハ痘科ノ諸昏ニモ取收メカレ
ハ。果シテ効アリヤ否ハ知ラサレニ誰
人力經驗セシ人ヲ得度キモノト。年來

思居リシナリ。余十餘年已前。大和ノ國
ニ遊歴セシ時。一小村ノ俗夫痘瘡目ニ
入リタルヲ療スルモノアリ。百日ヲ過
キサル内ハ。必ス効驗アル由ナリ。其人
ノ恠ハ。度々余カ講席ニ來ル。故余竊
ニ其男ニ其方ヲ懇請セシニ。先ツ痘者
ヲ診察シテ。眼病ノ藥ト偽リ。蛇虫下シ
ヲ飲セ。看病ノ者ニ言合ノ。此症ハ自然
必蛇虫下ルヘシ。便毎ニ必ヲ付テ。蛇虫
カ下リタルハ。速ニ示スヘシ。其蛇虫ノ

形状ニ從ヒ。藥方ヲ異ニスト欺キ。其蛇
虫ヲ得テ。黑霜ニ燒キ。乳鉢ニテ極末ニ
研リ。乳汁ヲ以テ。或ハ一眼。或ハ兩眼患ル
目中ニ。日ニ三度ツハ點シ。服藥ハ十二
ナリトモ。飲ミ好キ柔劑ヲ投シ置ハ。百
人ニ九十人マテ効驗アルト語レリ。余
其後本中綱目ヲ探リタルハ。蛇虫ノ汁。
目ノ翳膜ヲ除ク効ヲ出シタリ。此方モ
治療家ニ伝ヘ。經験シタキトニ思フナ
リ。又徐后山抑崖外編ト云。昏ニ。天台道

士痘瘡腐爛ノ成功ヲ載セ置キタリ。此
ハ全ク道家神仙ノ法ニテ。医家治療ノ
一ニ涉サレハ。痘科家痘事ヲ博ク知ラ
ント欲セハ。覺ヘ置モ可ナルヘシ。道士
痘瘡腐爛成功ノ一ハ。文長シ。今此
ニ載セス。本旨ニ就テ見ルヘシ。
○某氏又問曰。世俗痘瘡ニ灸療スル
固ク禁スルハ一般ノ習ナリ。中華ノ痘
科皆ニモ。灸療ヲ禁シタルモノナルヤ。
余答曰。諸ノ医書ヲ攷フルニ。古人ハ痘
瘡ニ灸療ハ忌サル。トト見ヘタリ。千金

翼ト云フ書ニ。豌豆瘡灸。兩手腕研子骨
尖上三壯。男左女右トアリ。証治準繩ト
云フ皆ニハ。薛痘疔又謂之賊痘。或三五
枚。或五六枚。間雜於諸痘之間。其色紫黯
作痛。不寧以致諸症蜂起。不能灌膿。甚至
不救。乃熱毒甚併結也。用仙方活命飲如
未忘急用隔蒜灸。若毒氣盛者。或不知痛
者。不用蒜隔。就着肉灼艾灸之。若灸後瘡
頭紅腫發焮。用針挑破出毒。灼艾尤好ト
アリ。又痘疹要本ト云。皆ニ活血解毒湯

空灸風池曲池三里トアルニテ。古人痘
瘡ニ灸療ヲ忌サルト知ルヘシ。
○某氏又問曰。麻疹ハ何レノ時ニ始リタ
ルヤ。余答曰。古人麻疹ノ始リヲ説キタ
ルヲ聞カズ。蓋シ古人ハ痘瘡麻疹一物
トセシト見ヘタリ。三因方ニ。斑瘡病以
白頭赤根者俗呼為豌豆。即斑瘡也。細粟
如麻者俗呼為麻。即膚疹也。又有大者俗
呼為羊。為萍。此皆輕重之不齊。故會名異
耳。トアルニテ知ルヘシ。

○某氏又問曰。痘瘡ニハ中華ニテ異名多
キモノナリト聞ケリ。愚未タ其異名ヲ
知ラズ。願ハ教ヘ玉ヘ。余答曰。余モ痘瘡
ノ異称多分モ知ラサレ。知リタルタ
ケノ異称ヲ舉ゲ示スベシ。赤水玄珠ニ。
自建武擊虜遂染其毒。流布中國。謂之虜
瘡。或曰聖瘡。言其變化莫測也。或曰天瘡。
言為天行疫疔也。或曰百歲瘡。言人自少
至老必作一番也。或曰豌豆瘡。言其形之
相似也。トアルハ。虜瘡。聖瘡。百歲瘡。天瘡。

豌豆瘡ハ。皆痘瘡ノ異称ナリ。三因方ニ
斑瘡大者俗呼為羊。為萍トアルハ。斑瘡
ハ痘瘡ノ古名ニテ。羊萍ハ亦皆其異称
ナリ。外臺秘要ニハ。痘瘡ヲ癰斑瘡ト云
ルモ。亦其古名ナルヘシ。
○某氏又尚曰。我カ
皇国ニハ。諸国ニ痘瘡神ノ祠字アリ。武
藏国ニアル祠字ノ愚カ覺ヘ居ルモノ
ヲ舉ルニ。浅中觀音堂ノ後ニアリ。其神
号ヲ尺庖瘡神ト云フ。曹司谷鬼子母神

ノ廟前ニアルヲ鷲神ト云フ。鴻巣ノ大
間村ニアルヲ宗像神ト云フ。其神号各
同ジカラス。中華ノ痘瘡神モ。其神号一
ナラサルモノナルヤ。余答曰。世ニ痘瘡
神ト唱フル神ハ。我カ
皇国ニテハ。上古伊香我色許男命ノ定
メ玉フ八十万神。及ヒ中世
延喜皇帝勅定シ玉フ。六十六州神社ノ
數ニ入ラヌ。不正ノ神ヲ尸祝セシ者故。
其称号モ定サルナリ。中華ノ痘瘡神モ

不正ノ神ト見ヘテ。其称一定ナキナリ。
信徴録ト云フ。昏ニハ。痘神号痘瘡太老
トアリ。耳食録ト云フ。昏ニハ。痘神盖女
仙之流。人呼為麻娘トアリ。獐園ト云フ
書ニハ。痘神名花々五聖。又曰痘鬼。又呼
魁星トアレハ。中華ノ痘神モ皆淫祀ト
見ヘタリ。

○某氏又問曰。中華八字内第一ノ文国ニ
テ。何等ノ物ニテモ。詩ニ詠セサル者ナ
シト聞ケリ。定メテ。痘瘡ノ瘕ヲ詠シタ

ル。アアルヘキナリ。何レノ時ニ始テ詩
ニ詠シタルモノヤ。示シ玉ヘ。余答曰。余
ハ二十四五歳ノ頃。梁川星巖塩田隨齋
ト云フ詩人ナドノ勸メニ依リ。一二年
ノ間。詩学三昧ニナリタル。アアリタル
氏。自ラ熟ト思ヒ考ルニ。勸善懲惡ハ詩
ノ用ナレ氏。三百篇ノ古経ニテ足ルヘ
シ。唐宋以来ノ詩風ヲ学ヒテ。其祖ノ妙
ニ至ルトモ。李杜揚陸ノ諸士ト軒輊大
ルノミニテ。彼ノ徒ノ如キ。世ニ有モ可

ナリ。無モ亦可ナル技藝ヲ学ヒタル氏。
誠ニ無用ノ長物ナルヘシト明メテ。我
家累世ノ医家ナレハ。儒学ノ暇ニ医書
ヲ讀ミ。我カ

皇朝

欽明天皇ノ御宇。医博士ヲ置玉ヒシ餘
風ヲ慕ヒ。古ノ医書ニ。少ノ発明モ出来
ハ。已カ保生ノ為メノミナラス。天下刀
圭家仁術ノ一助ニモナリ。幽冥ノ祖先
モ悦ヒ玉フベシト思ヒ定メテ。其後ハ

詩集ノ類ハ。廢絶シテ。更ニ手ニモ取ル
ルナリ。但儒經ト。医籍トノミ。因学セシ
故。古人ノ詩ニモ甚々昧キナリ。然シ詩
学三昧ノ時。隨園カ小倉山房集。及詩話
ナドハ。天下一般人口ニ。贈灸セシエヘ
我モ一讀セシナリ。其ヲリ隨園詩話ノ
中ニ。痘瘡ノ詩アリテ。抄録シ置テ。今ニ
アリ。其文曰。痘瘡之說。自馬伏波征交趾。
軍人帶此病歸矣。号曰虜瘡。不名痘也。語
見医統。余考史書。凡載人形体者。妍媸各

備無載人而麻者。惟文苑英華載潁川陳
黯年十三。袖詩見清牧。其曰。篇咏河陽苑。
時痘痂新落。牧戲曰。汝藻才而莖面。何不
咏之。陳忝聲曰。玳瑁心難比。斑犀點更嘉。
天憐未端正。滿面與粧花。似此為痘痂見
歌咏之始。トアリ。左スレハ俗ニアバタ
面ト云フモノ、詩ハ此ヲ始メトス。
某氏又問曰。痘瘡ハ自然ノ瘡ヲ待ズシ
テ。種痘スルヲ第一ノ良方トナスハ。我
西洋究理ノ説ナリ。何ニ様自然ノ痘瘡

八十人アレハ。七八人ハ難症ナルモノ
ナレト。種痘ハ十人ニ種レハ。二三人ヨ
リ外難痘ナキモノナリ。漢家ニテモ其
方アリヤ何如。余答曰。種痘ハ漢ニモア
リテ。医宗金鑑ト云フ。昏ニ始テ種痘門
ト云フモノヲ立テ、論シタリ。又黃晟
集驗良方ト云フ。書ニモ種痘ノ法ヲ載
セタリ。其文ニ曰。嬰兒痘症個々不免。或
週歲或二三歲。以至十歲。必要出痘。但痘
係天花。常因天行時氣而出。若本年時氣

好出痘保全者多。若本年時氣不好。出痘保全者少。嘗見一鄉之中。因痘而殤者。比戶皆然。甚是可傷。今福建廣東江西地方。向有種痘之法。每當天時溫和之氣。遇人家嬰兒痘稀少。取其痘殼四五粒。研為末。用綿包裹。男左女右。塞在兒鼻內。或以殼着皮上。二三日自然身熱出痘。所出之痘。輕者不過四五粒。重者不過一二十粒。痘稀毒亦稀。萬安萬穩。卜了。然。二。措臣卜云。人願休廣類集卜云。卜。昏。著。元。種痘。

ノ。フ。ヲ。痛。ク。排。斥。セ。リ。其言二曰。小兒種痘一說。縱使其術頗驗。後來定然復出。為患愈固。行此術者。甜言誘人。孰如痘出有時。惟當聽其自然。乃忽於安居無事之日。令其速出。因之現前受害者不少。此不待智者而後知也。余謂人育子。全賴父母心。田培植。方能保全耳。曾有敬痘神一對。秉天地推衡。種根苗。感念不爽。察父母善惡。施順逆。旋轉無差。卜論三。夕。余以為此論。八。君子ノ正論ニ非ルニ似レ。氏。種痘。

ヲ排斥セシハ。其見實ニ活眼ナリト思
フナリ。此種痘ノ丁ニ。余一ツノ話アリ。
足下善聞テ天理人情ヲ考テヘシ。扱テ
余京師ニ帷ヲ下シ。門人弟子ヲ教導セ
シ時。余カ門人中山某ト云フ者。長男次
女アリ。麗愛人ニ過ク。夫故ニ子ノ痘瘡
安穩ニ為サシメ度キトノミ。常々念慮
スル様子。外目ヨリモ見ヘタリ。其人祈
寒暑雨一日ヲ急ラス。余カ門ニ来リ。勉
学セラレシニ。或時十日餘モ見ヘカ
ル

故。余塾中ノ者ニ。中山某久シク見ヘカ
ルハ。何故ソト問ヒ尋タレハ。一諸生答
ヒ云フニ。某此頃医家ノ教ヲ受ケ。長男
ニ種痘シ。至極平穩ニ出齊シ。又其次女
ニモ種痘セントスル由。聞シナリ。夫故
来ラズト見ヘタリト告ケタリ。余此ヲ
聞キ。勃然変色シテ。歎シテ云ヒシニ。扱
テ扱テ。某平日聖道ヲ学ヒナカラ。道理
ニ昧キ人ナル哉。種痘スレハ百人ニ九
十九人迄輕ク安キモノニモセヨ。若シ

其中一人生命ヲ殞ス者アルモノナラ
ハ。苟モ天理人情ヲ辨ヒタル人ノ行フ
ニ忍ビザルナリ。況ヤ種痘ハ十人ニ
種テ。輕症平穩ナルモノハ。七八ニ過キ
ス。二三ハ或ハ難症。或ハ死也ニ至モア
リ。且又人ノ性質ニ依リ。一生痘患ヲ免
レ。長壽シテ終ル人ヲ間々アレハ。已ノ
子モ亦其性質ニ生レタルモ知レズ。夫
ニ強ヒテ種痘シ。縱ヒ死也ノ危ニ至ズ
トモ。求テ病苦ヲ為サシメハ。親ノ子ヲ

慈スルノ道ニ叶間敷ナリ。若シ又只独
ノ男子ナドニテ。不幸ニシテ。胎毒發動
スル矢先ヲ知ラズ。種痘シテ。毒痘ヲ患
ヒ。遂ニ死也ニ至リナバ。我子ニ不慈ナ
ルノミナラズ。祖先ノ血統ヲ求メテ絶
チタル道理ナリ。孟子モ不孝有三。無後
為大トノ玉ヒハ。已ハ大不孝ノ罪ニ陷
入。其子ハ不慈ノ禍ニ死シ。實ニ人倫ノ
大變ト云フベキナリ。總テ何莫ニテモ。
万ノ中。九千九百九十九追ハ大丈夫ナ

ル。一ニテモ。其中只一ツ受合難キ危
ハ。一アレハ。絶ヘテ行ハセラレ
カ。ハ。聖人ノ道ナルナリ。勿論人ノ生死ナド
ハ。何レノ時ト云フ。一ハ分リ難キ者ニ
テ。今迄無病息災ニ居リテモ。忽然卒死
スルモノモアリ。万一已カ子命數ニテ
死スル時向ヒ来リタルニ。不幸ニテ其
死ニ種痘シテ死タレハ。縦ヒ命數ニテ
死タリトモ。親カ子ヲ害セシ咎ハ逃レ
間敷ナリ。異誅幽責實ニ畏ルベシ。扱又

我子ノ安穩ヲ求メテ。危キ種痘ヲ行フ
ハ。兵家ニ所謂陷之死地而求生路ト云
フモノナリ。豈ニ親ノ子ヲ視ル。一。戦鬪
ノ間ニ。大将ノ已カ血脉モナキ処。士卒
ヲ視カ如クニシテ可ナランヤ。種痘ハ
實ニ中庸ニノ玉フ。小人行陰而徼幸ノ
類ニテ。仁人君子ノ行ベキ。一。非ルナ
リ。親ノ其子ヲ愛スル道ハ。世ニ痘患一
生免テ長壽ニテ終ル人モ間々アレハ
我子モカクアリタシト心ニ願ヒ。願フ

テ出来ヌ丁ナレ氏。左様思フコリ道ナ
ルヘシ。然シ夫ハ人力祈願ノ叶ヘキ丁
ニ非レハ。平生其子ニ。飲食有節。起居有
常。寒温従時ノ養生ヲ教ヘ。輕痘ニナル
服藥ヲトサセ。天然痘瘡ノ運當ヲ待ベ
キナリ。カク追愛憐ヲ加ヘ。人力ヲ尽セ
シトモ。其身ノ不幸ニテ。難痘ニ嬰リ。死
凶ニ至リナバ。此ハ實ニ天命ト明ナル
ヨリ外。天理人情ノ道ナキモノナリト
論ジテ。諸生ニ令ジ。急ニ其人ヲ余家ニ

召寄。右ノ議論ヲ言ヒ聞セ。又重子テ言
曉スニ。足下若シ万乘国ノ大夫ニシテ。
万一幼君未タ痘瘡濟セ玉ハカレハ。万
全ヲ求メントテ。種痘ヲ勸メ行ヒ玉ハ
使々ヘキヤ。其時ハ万一危難ナキノ受
合モ出来難ク思フ筈ナレハ。品ニヨリ
異変アリ玉ハ。其身ハ生存ニ過キ難
ク。一家ハ滅亡ニ及ヘシト思ヒ。慎恐テ
種痘ハ勸メ間敷ナリ。臣ノ君ヲ視ト。父
ノ子ヲ視ト。輕重齊シカラズト。虽皆人

倫ノ大者ナレハ。万ニ一ツノ危フム
アル事ハ行ヘキ者ニ非ルナリト説キ
聞セタレハ。其人始メテ感歎解悟シテ。
次女ニ種痘セシト止メラレタリ。扱
テ西洋ナトハ。固ヨリ聖人ノ教化ナキ
国ナレハ。小道ヲ道ト思ヒ。大道ヲ失
多カルベケレハ。種痘ハ天理人情ニ叶
ハカルトニハ。心付サルハエトソリナ
レハ。深ク咎ムルニモ足ガレハ。清朝ノ
康熙乾隆ノ二帝ハ。皆聰明ノ君ナルニ

御纂金鑑ニ。種痘門アルヨリ。遺憾ト云
フヘシ。是全ク中華ナドモ。聖人ノ道昧
ミタル故ト。感傷ニ堪サルナリ。
某氏又問曰。凡ソ人死ヲ哀サルハ無レ
氏然シ。痘瘡ニテ愛子ヲ喪ヒタル母ノ
哀ハ。就中甚キモノト見ヘテ。先頃一病
家痘児ヲ喪ヒ。其母哀傷甚シク。四五日
間落涙絶ヘス。遂ニ盲目ニナリタリ。奇
ト云フベシ。孔夫子ノ門弟子。子夏ト
カ云フ人ハ。子ヲ喪テ。目暗ニナリシト

云フナリ。人口ニ伝ヘ聞キ居リタレ。其虚實定ノ難ク思ヒ居リシニ。見母ノ
盲目ニナリタルニテ。其事ノ實ナルヲ
知リタリ。如此ナリ。漢ノ医經ニモ。沙汰
ルナリ。余答曰。落淚甚シキニ依ツテ。
盲目ニナル所以ナリ。古ノ神聖委ク説キ
置玉ヘリ。靈柩口尚篇曰。悲哀愁憂則心
動。心動則五藏六府皆搖々。則宗脉感。宗
脉感則液道閉。液道閉故上液之道閉。則
泣々不止。則液竭。液竭則精不灌。精不灌

則目無所見矣。トアリ。是哀傷度ニ過キ。
落淚止カレハ。盲目トナル所以ノ義ナ
リ。今ノ世俗泣テ目玉ヲナキツブスト
云フ語モ。本灵柩ヨリ出タルモノト見
ヘタリ。

○某氏又問曰。愚カ今語ル所ノ見母小兒
患痘ノ時。愛憐人ニ過キ。痘兒ノ屎尿ヲ
嘗ミテ。日々ノ味ヲ愚ニ告ケテハタリ。
愚モ屎尿ノ味ヲ診察ノ用ニセシトハ。
我蘭家ニ未タ聞カサルトナレハ。但唯

諾シテ聞置タリ。漢家ニハ。此ヲ診察ノ
用トナス。アルモノナリヤ。余答曰。尿
尿ノ味ヲ以テ。疾病ヲ知ル。ハ。医書儒
書俱ニ見ヘタリ。名医別錄ト云フ。昏ニ
人尿味苦。人尿味鹹。此言平人尿尿耳。若
病人則尿甘而尿甜トアリ。外臺祕要ニ
ハ。李即中消渴論ト云フ。昏ヲ引テ。消渴
者原其發動。此則腎虛所致。每發即小便
至甜トアリ。是尿尿ノ味ノ驗。医昏ニ見
タルモノナリ。又歴史綱鑑補ト云フ。儒

書ニ。魏元忠病。郭霸往問之。曰。嘗其糞喜
曰。糞甘則可憂矣。今苦無傷也。トアレハ。
尿尿ノ味モ。亦病診ノ用ニナルモノト
見ヘタリ。

○
某氏又問曰。世俗ニ。痘兒年七歲。或八十
六歲ナレハ。多分ハ危難ノ症アルモノ
ナリト云フ。人アリ。此言取ルニ足ル
トト思ヒシニ。痘瘡流行ノ時。多ク病者
療治シテ。フト其言ニ心付。前後攷ヘ
ルニ。其言多分當レル様ニ思ル。ナリ。

此俗説ニモ何リ本ツク処ニテモアル
者ナルヤ。余答曰。世俗ニ云フ厄年ヲ。道
家ニテハ厄會ト云ヒ。医流ニテハ年忌
ト云フ。古昔ヨリアルナリ。然シ道家
医流其年忌各同シカラス。医流ハ專ラ
疾病ノ厄年ヲ説キ。道家ハ重ク他ノ禍
災ヲ説クニ依テ異ナル所アルト見ヘ
タリ。今聞七歳十六歳ノ痘見ハ。危難多
シト云フ俗説ハ。靈柩ニ本ツキタルモ
ノナルヘシ。靈柩陰陽二十五人篇ニ。黃

帝曰。其形色相勝之時年加可知乎。岐伯
曰。凡年忌下上之人。大忌常加七歳十六
歳二十五歳三十四歳四十三歳五十二
歳六十一歳。皆人之大忌。不可不自安也。
感則病行。失則憂矣。當此之時。無為玄事。
是謂年忌トアリ。是疾病厄災ノ年期ト
見ヘタリ。

○ 某氏又問曰。痘瘡ハ奇病ニテ。我カ
皇國ノ内ニテモアル歟モアリ。又無キ
歟モアリ。既ニ八大嶋ニハ無キ由ナリ。

然シ其人嶋ヲ出テ。伊豆国ナトニ渡リ
来レハ。矢張痘瘡ヲ病ム由ナリ。又天州
島ナドハ。痘患ノ人アルハ。嚴敷忌ミ。嫌
フテ。父子兄弟ノ間ニテモ。嚴ニ其人ヲ
別処ニ移シ。看病シテヤラヌ由ナリ。如
是。中華ナトニモアル。ナリヤ。余答
曰。五雜俎ト云フ書ニハ。鞭靽種類生無
痘疹。以不食塩醋故也。近聞其典中国互
市。間亦学中国飲食。遂時一有之。彼人即
昇置深谷中。任其死生。絶跡不敢省視矣。

一云不食猪肉故尔。トアリ。又或人ノ隨
筆中ニ。朱佩章来客長崎日。有司問以痘
瘡不行地。對曰。山西大原府上卿堡小兒
不發痘瘡。トアルハ。中国ニモ亦痘瘡無
キ処アルト見ヘタリ。夷俗記ト云フ書
ニハ。夷人原不知穢祥之說。其所最忌者。
無過於痘瘡。凡患痘瘡。無論父母兄弟妻
子。俱一切避匿。不相見。調護則付之漢人。
如無漢人。則以食物付之他所。令患痘者
自取之也。至若夫妻之患痘也。必俟聞雷

声。然後相聚。不聞雷声。則終年避匿。如路
人然。其地寒。患痘者少。視內地若火宅。不
肯久留。慮患也。トアルハ。天州島ノ風俗
モ。夷俗記ニ認ノアル如ク。畧相同キト
見ヘタリ。痘瘡ハ縦ヒ如何ナル惡病ニ
モセヨ。肉族ノ間ニテ。カク忌ミ嫌フヘ
キ道理アルマシキナリ。既ニ孔夫子ノ
弟子伯牛ト云フ人ハ。癩病ニテ死セシ
ニ。其最後ノ時。夫子其手ヲ執リテ哀ミ
玉フトアルハ。如是大惡疾ナハ。師弟ノ

間ナレハ。手ヲ執ルヲ嫌ハセ玉ハズ。
況ヤ父子兄弟ノ間ヲヤ。天州島ハ小島
ナレ。然シ我カ

皇国界域ノ内ニ在テ。夷俗ヲ免レサル
ハ。辱ヘキナレハ。何卒其如ノ奉行ヨ
リ言ヒ悟シテ。風俗ヲ改メサセタキモ
ノナルハ。

○某氏又問曰。痘瘡ノ丁色。承リ種々解
悟セシカ。但痘瘡ノ丁ノ中ニテ。最モ分
ラヌハ。其病因ト鬼神憑トノニツナリ。

叔此ハ西洋ノ説ニモ明カナラズ。又漢
家ノ説モ諸人ニ問ヒ尋ルニ皆孟浪ノ
説ニテ未タ信スヘキ説ヲ聞カズ。先生
ニハ定メテ確説アリ玉フヘク思ハ
ナリ。願クハ衆解惑サセ玉ヘ。余答曰。
痘ノ原因ハ病ニ非ズ。人ノ餘精ナリ。又
奇異アルハ鬼神ニ非ズ。人ノ精爽ナリ。
其義委ク論シ聞カスヘケレ。今ハ最
早五更ニ及ヒ酒アルモ有尽キ。余モ亦
談論ニ倦タレハ先ツ論説ハ止メニシ

テ下物ナケレ。大白ヲ舉ケ。醉ヲ取テ
歸ルヘシ。明夜余足下ノ家ニ往キ。復々
對酌シテ。右ノ説ヲ話スヘシトテ。互テ
鯨飲シテ。余醉中ノ興ニ已カ不得手ノ
詩一首ヲ作り。乃チ歌曰。蘭賓漢主漆膠
交。論説不同何。用嘲對酌勿嫌無。下物蟹
行鳥跡是嘉肴。放吟既ニ終リ。余ハ其席
ニ醉倒セリ。痘ノ原因ハ病ニ非ズ。痘者ノ
奇異アルハ鬼神ニ非ズ。余ハ其席
ニ詳カニス。

漢蘭酒話卷之下終

